

箕面中央ロータリークラブ
幹事

酒井 俊一

平成21年4月24日、大阪大学新聞会の諸君4名(A,B,C,D)を招き、座談会を催した。当クラブからも論客4名(a,b,c,d)を出し、私が司会役で1時間半に及ぶ論戦を行った。テーマは新聞に関すること、若者に望むこと、などであった。

a：最近インターネット（IT）の発達に伴って、若者の活字離れ・新聞離れが進んでいる。ITによって自分の欲しい資料がすぐに手に入る便利さと、情報が行き交うことによる技術の進歩がもたらすプラスの面が多いのは確かだが、反面、自分の専門領域・自分が興味を抱く領域だけに知識や思考が偏り、視野が狭くなり、広い世間を見渡せなくなる危険性がある。

b：私は60歳を過ぎ、未来を考える時たかだか20年後しかない。一方20歳の皆さんたちの未来は60～80年後を意味し、21世紀をどう生きるかの問題になってくる。グローバル時代になって、日本人も国際人に変身しないと地球号のファミリーにはなれない。

大阪大学新聞は創刊以来37年の歴史があり、皆様の努力は多とするが、企業の寿命は30年と言われるので、大変革の時が近づいているように感じる。

A：新聞の良さも認識して欲しい。紙に印刷されてあれば、アンダーラインを引くことができるし、繰り返し読むこともできる。

新聞には自身が興味を持たない内容まで書かれていて、それが敬遠される理由の一つとなっている。しかし、新聞のこの特徴は、私たちが日頃触れることのない事実や価値観に出会える機会を提供してくれるものと捉えることができる。そのような意味で、ITにはない付加価値のある新聞を製作して行きたいと思っている。

B：私はこの3月に大阪大学基礎工学部を卒業したが、その後放送大学に再入学し、現在、教育学を学んでいる。なぜ教育の道に変えたかと言

うと、サークル活動で小学生と携わり、教育に関して学んでいく中で、今の日本は教育が大きな課題になっていると感じたからだ。

今の教育を見てみると、子どものすべてを受け入れるということが先行していて、正しい価値観などが教育できていないように思う。その中で今必要なことは、教育すべきことを堂々と主張できる人ではないかと感じている。

C：私は京都大学在学時（現在大阪大学大学院）に新聞を作っていたが、特に人の「生き方」にフォーカスしてニュースを選択し、記事を書くようにして来た。そして、読者に考える機会を提供しようと目指していた。ITのニュースは多くあり、何を見ていいのか分からないということもあるが、新聞の記事では、さまざまな事実を集めた上で、一つの「観」を持って書かれているので、読者の方が考え、意見を持つ上では有効だと思う。

D：新聞の長所・短所について、長所はしっかりした見識を持って、真実を伝えて行くことができる。一方、ITは情報の信憑性に欠けるとも言われている。今後は確固たる見識を持ち、世の真実を伝えるための一役を担って行きたい。

c：いろいろな意見があるが、私は頭に残るためには新聞が良いと思う。

d：紙面に書かれた記事が如何に大量の情報を凝縮したものであるかが分かる。実は、この凝縮の過程に問題がある。紙面の広さに制約があるため、一人の記者の主観によって凝縮されざるをえない。

新聞は1つの文化であるが、将来は消えて行く文化なのかも知れない。過去の例でも30年位で消えて行った文化がある。立場の異なる読者は同じ情報から全く異なる判断をすることも。その意味で、新聞はITの時代には滅び行く文化ではないだろうか。

A：IT上での新聞公開が大きな可能性を秘めて

いるのは確かだと思う。紙上では文字数の都合で情報量に制限があるが、IT上では関連情報や読者に有益な情報を自由に提供できる環境にある。

読者にとってより良い新聞を目指して行くのであれば、将来、紙媒体は廃止され、新聞は完全に電子化されると思う。また、環境面から考えても、紙資源の節約につながる電子化が推し進められて行くと思う。

c : 活字を読むのは教育的にも大切で、私は「主張欄」を毎日読む。

d : 私はかつて新聞の誤報に巻き込まれ、迷惑を被ったことがあった。記事を書く時は、公明か、公平か、真実か、を忘れないようにして欲しい。一度吐いた唾は自分の唾でも飲み込むことは出来ない。

c : 私は新聞を読む方が落ち着いていて良いと思う。1868年の明治維新（幕末崩壊）の時代背景とそれぞれの人々の立場において起こったことや、明治末期から世界大戦までの日本と、大

正・昭和に向かう昭和近代史をしっかりと学んでおくと、間違った日本が見えて来るし、明治維新の功罪も明らかになる。

それはこれから社会の第一線で活躍されるであろう諸君に期待している所が大きく、打たれる強い杭になって欲しいからに他ならない。問題は現状解析と近未来をどう考えることが出来るかであり、今日の現状はまさにそれを象徴している。

酒井 : 今日集まって下さり有り難う。残念ながら私が望んでいた雰囲気とは異なった厳しい座談会に終わってしまったが、良く解釈すれば、世の中にはいろいろな考えの方がいることが分かり、新聞という文化の長所・短所も浮き彫りにすることができたのではないかと考えている。

とかく年寄りには自分の経験から偉そうな口をきくが、次の世代を担うのは若者たちであり、過去の歴史を見ても分かるように、若者の力にこそ期待され、他に道がないと言っても過言ではない。まあ頑張ってください。



新聞会の諸君4名と座談会